

## むかしと今とこれから

むかし、ひと昔まえといえは10年くらい前だが、もっと前。今の時代とは少しかけ離れている感じ、いわゆる古き良き時代というヤツ。

むかしは良かった、という人がいるが、今に満足してない訳でもないが、あの頃を思いだし、何かを伝えたいことがある。いずれにしろ、年を重ねた人の時代を感じる出来事だったのである。

その昔、ずっと昔。ある人は昼休みになると、フラッと外へ行き、近くのそば屋で昼を済ませ、何もなかったかの如く、午後の授業に入る。またある人は、いつも出前でそばを食べ、代金を入れ忘れたり、そうかと思えば、払いすぎたおつりをいつまでもそのままにしておいたり、お金、小銭にはあまり頓着しないのか、まあ面白い。でも年を重ねると昼はメンでもOKとは共感できる。

これも昔、遠征先で昼食に誘われる、暑いので内から冷やすかと、冷たい飲み物を注文する。出てきたのは中瓶とコップ、チョット一杯なんて、これも昔の話だから、大昔の。

校内では職員室も多く、教室など小部屋がたくさんあり、中にはたばこ部屋なるものもあった。授業以外はそこにいるため、用があれば、あそこだろうと予想もつく。四六時中いるので、ちゃんと授業をやっているのかとも思う。

そんな先輩方の一人に、オレも残りわずかだから、この先はお前が部活をやれといわれ、今に至る。

人はギリギリ、道具も場所もない、あるのは少ないながらも、まとまり感のある部員の少しのやる気。技術なんてまずない、ルールも知らない。フライなら捕ればアウト、打席で空振りを三回したらアウトだから、いつまでも打席にいないで早くベンチに戻って来るということも教えた。

託すといわれても、どうしていいのか、スタート時は課題しかなかった。そこから、まず選手を鍛えて少しでも上手くしてやろう、新しい選手を入れ、さらに活気のあるチームにしていこう。これが最初の思いだった。中学の大会に行き、顧問にあいさつして、宣伝する。名も無く、実績も無い。誰がこんなチームに選手など送るのか、勧誘活動は非常に困難な状況であった。それでも足繁く中学校など通い、少しずつ信頼されるようになり、少しずつ有望な選手を送ってもらった。しかしその反面、まだまだ、双方の捉え方の違いで、お互いに合致した形とは程遠く、入学手段として推薦を使い、入るだけ入れて、活躍できずにいる子もいた。いまでもこそ、HPやインスタグラムなど発信する媒体は多種多様で、情報の公開もでき、志望校のひとつに挙げてもらえるが、当時は部活動の知名度や活動内容など知る由もない。それでもあの時あの先輩から受け継いで、こうあるべきと思い描いたスタイルはそのまま引き継いでいる。これは何があろうと崩してはいけないと思っている。

あの頃、練習場所はテニスコートの北側で、その昔は、バレーコートだった。毎日ネットの支柱を外して活動し、終わったらまた、入れる。これは筋トレになっていたのかもしれない。少し練習したら、その成果も見てみたい。誰が相手してくれるのか、どうやって相手校へ行くのか。練習場所もままならないなら、いつでも動けるようにバスでも買ってしまえと、元手もないのに、勢いでマイクロを購入してしまい、ここから抜けるに抜けられない沼にはまった。しかも、何の因果か、このマイクロの番号は「1981」イクエイで、乗り出し 100 萬。なんだか嬉しいのか悲しいのか、とても複雑な思いだった。それから二台目、三台目、今のナンバーは「…4」と四台目となる。一台目で終われば、まだ抜けられたのに、二台目を買わざるを得なかったのは社会の変化に伴うバス・トラックの排ガス規制なるものであった。この装置がないと、都内に入れず、いつでも、どこでも動けるための手段なのにその意味がない。これでマイクロから中型バスへ移行する。このバスは最高だった、バーストを除けば。一台目はボロボロになり、廃車になるまで剣道部が引き継ぎ、二台目もサッカー部がソフトの看板のまま乗りつぶし、三台目の物も見たいは良かったが、安物買いの…ということ、すぐに四台目となる。バスに関してもこんな感じで、これも色々あった。

場所においては、サッカー部が校庭を利用していたが、高崎インター近くの人工芝グラウンドへ移転したことにより、現在の場所で、野球部の隣でナイターの木漏れ日を受けながら暗くなるまでボールを追う。さらに寮に関しても同様にサッカー部専用寮の完成により、元の男子寮から女子寮へ改装され、女子サッカー、ソフトボールなどの部員が生活できる。

人、場所、スタッフなど色々な環境が整った令和元年、初のインターハイ出場。これからさらに波に乗ると思われた時にコロナの発生。この出来事はソフトボールばかりでなく、生活など全てにおいて、影響を与えた。

私自身は委員長という立場で、自分のチームもそうだが、専門部の活動においても、この先の不安を感じていた。

あれからまた少し経ち、選手はそんな限られた環境でも、徐々に力を発揮し、新人戦を制し、選拔出場を果たす。さらに翌年、二年連続の出場となる。目標であった、全国ベスト 16 を超え、ベスト 8 の実績をあげた。そうなれば、インターハイもと思うところであったが、力を出せずして終わる。投手・捕手を軸とした中心線に要の野手と、打てる選手が居たにもかかわらず、勝てなかった。結果が出せなかった時期はいつも挑戦者として、強そうなチームと対戦する時に、強いチームが勝つとは限らない、勝ったチームが強いのだ。と言いつけていた。これが、ベースボール型競技の面白いところ、やってみないと、わからない。だからこそ、そこに魅了される。今の代は力がない。ここから練習して上がるしかない。

そして、先輩はまた、歴史を変えた、国民スポーツ大会への出場、厳しい関東ブロックを突破した。競技スポーツの最高峰はオリンピック、その次の頂点は国スポ、また素晴ら

しいことを成し遂げた。

これから高校のソフトボールはどうなるのか。来年はボールの形状が変わる。縫い目が盛り上がり、握りやすくなるという。これは投手目線の考え方、手の小さい、指の短い野手はどうなのか。捕球後の握り替えはできるのか。大きさは変わらないが、打球や送球はどうなるのか。色々な対策が必要とされるだろう。ソフトボールというと、ゴムの白いボールをイメージするが、海外では黄色の革ボールしかない。日本がその種目に入りやすいように、また、ボールメーカーが工夫して、販売実績をあげるために作ったのが、ソフトボールと軟式野球、軟式テニスはゴムのボール。だからボールが軟らかく競技に入りやすい。軟式野球とか軟式テニスは外国には無い。世界的にソフトボールといえば、白ではなく、黄色が国際ルール。革ボールなら当然、縫い目はしっかり浮き上がっている。そのための対策なのか。以前、投手からの距離が変わった時、投低打高に変化した、それでも、投手力を含む守備力の向上により、1点差を争う攻防に戻った。今回のボールの変更はどんな効果があるのか、ソフトボールが変わって行くのかも知れない。

また、少し先には、南関東総体がある。さらに群馬国スポがある。イベント的には盛り上がっていく傾向だが、実情はどうだろう。競技人口の減少、運動をやる子どもが減っている。ソフトどころか、スポーツ全体の危機である。それでも、人気の種目は競技人口を伸ばしているのか。不安でいっぱいである。あの時、先輩に任されたチームはここまで成長したと伝え、そして、次の世代の準備もしたいところだ。

毎年、毎年、学年が変わり、新しく部員が入る。その代わりに卒業していく部員もいる。いつも、送別会で言うのは、結婚して家庭をもって子どもができたなら、また同じ道を歩ませて欲しい。この先、競技を続けなくても、それが、今までやってきたことの恩返しではないのか。親のおかげで学校に入れ、部活動ができる。この恩をのちのち、そのまま親に返すことは勿論だが、スポーツによって、成長できたこと、色々な経験を通して社会に出る準備になったこと。今分からなくとも、大人になって、親になった時に感じてもらえれば良い。高校の時はつらくて何度も辞めたいと思ったけど、続けて良かったと思える日がくるといって送り出している。顧問の檄しか聞いてない、褒められた覚えなど一度もなかった。だけど、一緒に過ごした仲間がいた、苦しい時に親に励まされた。仲間だけど、ライバルには負けたくない、日々練習し、遅くまで頑張った努力は必ず報われる。無駄な努力など絶対ないと、心に留めて、この先も過ごして欲しいと思っている。